

良いジャッジとはどうあるべきか

是澤克哉

(獨協大学卒 株式会社 福富商会勤務 魁メーリングリスト初代管理者 暁代表)

はじめに

現在の英語政策ディベート界¹はジャッジの層が一年間で大きく入れ替わる。多くは4年生と社会人1年生(5年生)で構成され、半数以上のジャッジが一年間のみジャッジを経験して辞めていく。大会にもよるが、3年目になると同期のジャッジが圧倒的減っていることに驚く。このような環境の中で良いジャッジを育てることは難しいかもしれない。しかし、だからこそジャッジ教育のためのセミナーやジャッジに関する意見を今こそ必要としているときはないのではなからうか。

この文章はディベーターの議論の向上にもっとも貢献するジャッジに焦点をあて、ディベート界全体にとって「良いジャッジとはどうあるべきか」を考えることを目的として書いた。そしてこれから書く内容は、私の3年間のジャッジ経験を通しての現在の英語政策ディベート界に対する一つの見解である。文章のなかには、ある特定のジャッジを指しているかのような箇所があるかもしれないが、そんなことはどうでもよいことである。肝心なのは、「良いジャッジ」について考え、「良いジャッジ」が正当に評価される環境を作ることだと考えているからだ。

¹私は日本ディベート協会(JDA)で決定した政策論題に基づいて、全日本英語討論協会(NAFA)や各大学のESSなどで主に主催されているスタイルのディベートを「英語政策ディベート」、もしくは「ポリシーディベート」と呼んでいる。ここに関しては様々な議論があるかもしれないが、政策に重点を置き、客観性のある証拠資料に基づいて議論しているのであれば、そう呼んでも間違いではないからである。たとえるなら、鯛をみてそれを魚と呼ぶようなものであり、すべての白人をみてアメリカ人と呼ぶ場合とは別個であると考えている。

1. ディベートジャッジの役割

「良いジャッジとはどうあるべきか」を考える前に、まずディベートにおけるジャッジの役割について考える必要がある。私はジャッジの役割は大きく分けて二つあると考えている。一つはディベートの試合の中で議論を正当に評価し、勝敗の判定を下す decision maker(判定者)としてのジャッジの役割と、試合後ディベーターにフィードバックをする educator(教育者)としての役割である。そして後者の educator(教育者)としての役割がスポーツなどの審判と一線を画する。なぜなら、ジャッジの判定がディベーターの議論の仕方やその内容を変えてしまうくらい大きな影響を彼らに与える点にあるからである。

矢野善郎現 JDA 副会長は、ディベートにおけるジャッジの存在を以下のように記している。

ジャッジは、言うまでもなくディベートの勝者を決める。しかしジャッジの影響は、特定の試合にだけ及ぶだけで、おしまいになる訳ではない。ディベーターは、勝ちやすいディベートのスタイルを選択していく。そうするとジャッジは、試合で勝者の選択していくことにより、結果としてディベートのスタイルも選択していくのだ。つまりジャッジは、多かれ少なかれディベートとは何かを決めていく存在でもあるのだ。ディベートにおけるジャッジの存在は大きい。(189)

つまりディベーターはジャッジに適応することにより、勝ちやすいディベートのスタイルを確立しているのだ。ディベート界の議論の向上を考える際、ジャッジの質の向上は欠かせない。

2. 現在の英語政策ディベートにおけるジャッジの問題点

そこでまず「良いジャッジ」を考える際に避けることができない、現在存在する「悪いジャッジング」について考えていきたい。私は「悪いジャッジング」が存在しなければ当然「良いジャッジング」という概念も存在しないと考えている。だから、ここでは私が英語政策ディベート界で散見した「悪いジャッジング」についていくつか書いていきたい。

2.1 マニュアルジャッジング

前回の『ディベート・フォーラム』の Editor's Comment の欄に「人は理解できないことは心理的に拒否する。」と書かれてあった。私はジャッジが議論を分ろうと努力をしない姿勢こそが、ジャッジのもっとも悪い問題ではないかと考えている。だが、残念ながらこの言葉は今の英語政策ディベート界のジャッジに当てはまる部分がある。「自分が理解できないディベートを心理的に拒否しているジャッジがいる」のだ。私はそれを「マニュアルジャッジング」と命名することにする。

ここでいう「マニュアルジャッジング」とは、「ディベートの理論などの枠組み（マニュアル）を先に自分で決めてしまって、そのマニュアルに固執するジャッジング」をさす。さらに問題なのは、それに基づいたディベートをディベーターにさせているところにある。まず、自分の理論でがちがちにディベートを制限させてから、ジャッジをしているのではないのかと。だから、自分の枠組みにそぐわない議論（たとえばクリティークなどの評価方法の難しい新出の議論）や自分のフィロソフィーと相反する議論などが出てきた場合、最初から理解しようとせず、否定する。もしくは、評価できないとバロットに書き記す。彼らの「マニュアル」にのっていないから。

「ディベーターが自分たちしか分からない議論を展開することが彼らの自己満足であるのと

同じように、ジャッジも自分にも合わせてディベートをしろとディベーターに要求することはジャッジの自己満足ではないか」と私は考えている。

一つ例をあげる。あるジャッジは、試合前に「俺は英語があまりできないから、俺に合わせてゆっくりディベートをして欲しい。」と要求した。論題の知識に関してならまだ分かる。しかし、英語に関してディベーターにそう要求するのは間違いであると思う。少なくとも自らが英語政策ディベートを経験したジャッジであるならば、多少早くても「遅くしろ！」とディベーターに要求するのではなく、「自分が早いディベートに合わせられるように努力するべきではないか。」と思う。ましてや、ディベーターはどの程度遅くすればそのジャッジが理解できるのかなど、分からないのだ。（NDTのジャッジをしろといっているのではない。）

誤解のないように付け加えておくと、だからといってディベーターはジャッジを無視して好きなように議論を展開すべきだと言っているのではない。ジャッジはディベーターの議論に耳を傾けるべきであり、ディベーターはジャッジに分かりやすい議論を展開するように努力する。そしてその結果、ジャッジとディベーターに相違があり、その相違が、ディベーターの納得できるようなものであれば、改善するべきだと思う。悪いジャッジに合わせて自分たちのディベートの質を下げることはない。ディベーターが信念を持って取り組んでいるディベートをジャッジの一言によって簡単に変えて欲しくないのだ。

2.2 シンプルファイズド・ジャッジング

次に取り上げるのは、議論を「単純化しすぎるジャッジング」である。バロットをみると一目瞭然だが、Reason for decision が Result for decision になっている。そして、このようなバロットを書くジャッジが依然多い。「冤罪が増えるか減るかよく分からないので両方 Offset しま

した」と結論だけ書かれてあるパロットがその典型である。

ジャッジの頭の中では様々な角度から分析されて、そしてそのような結論に至ったのかもしれない。しかし、ディベーターはそのジャッジのどこがどう分からなかったのか知りたいのだ。つまり、ジャッジの思考過程を知りたいわけで、結果のみを知りたいわけではない。当たり前のことだが、そこができていないジャッジは多い。

たとえば、「adv. 1: No Inh. =今でも冤罪がある。よって、肯定側の政策をとっても変わらない」と書くのではなく、「adv. 1:陪審員制度を導入すると冤罪が減るとい議論に関して、否定側の一連の議論は、相対する原因を出し、現状の職業裁判官のみで裁判を執り行うことが、裁判自体もスムーズに展開し、それが経験的にも冤罪の原因となる要素をなくす効果があると証明していた。それに対し、肯定側の読んだ1行のエビデンスには人間には間違い(冤罪)があるということしか述べておらず、この証明だけで、冤罪の数が変わらないという主張を十分にできているとはいえない。よって、証明の部分で否定側に分がある。」と書くべきである。さらにここで肯定側にどのように議論すれば良かったかなどのアドバイスを書ければ、より高いフィードバックをディベーターに与えることができる。

さらに私はこの Offset という単語がパロットに書かれていることに違和感を抱いていて、使うことを避けている。本当に Offset して利益も不利益もなくなる議論などあるのだろうか疑問に思うし、この単語を使うことでジャッジの思考回路を極端に単純化し、ジャッジが議論の過程を詳しく書かなくなってしまっているのではないかと懸念もしている。試合後のリフレクションや口頭による判定理由の説明が義務でない以上、パロットを書いてディベーターにフィードバックすることがもっとも大切なジャッジの仕事の一つである。「冤罪が起きる」と結果だけを書くことよりも、「冤罪がどの程度起こるのか」という確率(リスク)を詳細にパロット

に書くべきだ。

そしてジャッジがパロットを簡略化して書いてしまうとディベーターもそれに倣ってスピーチを展開してしまうだろう。それが勝ちやすいディベートのスタイルや考え方だと思ってしまうからだ。

2.3 サブジェティブ・ジャッジング

次に紹介するのは、文字通りパロットに「個人の価値観を必要以上に反映させるジャッジング」である。たとえば、「私に分からなかった議論はとりません」とパロットに書くジャッジもこの範疇に入る。

ここでいう、「<私が>分からなかった議論はとりません」ということは何を意味しているのか。ディベーターは、ジャッジひとりひとりを相手にディベートしなければならないのか。議論が分からなかったのか、または英語がわからなかったのか、など様々な誤解を生むことになる。

そして、このような書き方は、「あのジャッジは分からなかったけど、あのジャッジなら分かったのか」というジャッジ間の理解力の差を露呈させるだけでなく、ディベーターが混乱するおそれがあるだろう。なぜなら、彼らは「分かる分からないという結果を聞きたいのではなく、ディベートの中でどのようにそれぞれの議論が評価された、またはされなかったのか」をもっとも知りたいからだ。

パロットに書くことは「<私が>どう思った」という個人のレベルではなく、どこ部分为非論理的で、証明不十分で、理解できなかったのかを書けばいい。そこに「私」という主観をあえて挟む必要はないのではないかと。なぜなら、ジャッジは試合の中で展開された議論に関して判定理由を書けば良いのであり、自分の主義主張を強くパロットに反映させる必要はないからである。次で詳しく述べるがジャッジはできる限り主観を排除して判定を下さなければならな

いのだ。²

3. 良いジャッジを求めて

最後に今まであげた現状の問題点をふまえて、ディベート界全体にとって「良いジャッジとはどのようにあるべきか」を考えていきたい。前にも触れたが、ジャッジの役割はディベートの勝敗を判定する decision maker (判定者)としての役割とディベーターへフィードバックする educator (教育者)としての役割がある。ここではこの二つを分けて分析していく。

3.1 良いディシジョンメーカーの条件

3.1.1 客観性のあるジャッジ

はじめに、良いディシジョンメーカーの条件として挙げられるのはジャッジの「客観性」である。ここでいう「客観性」という言葉の定義の統一は難しく、多種あると思うが、私は「客観性」を「できるだけ主観を排除して議論を正当に評価すること」と定義している。これはディベーターが提出する議論に偏見を持たず評価し、判定を下すことであり、どんな議論に関しても公平に評価しなければならない。なぜなら、ディベートで競われるのは「第三者であるジャッジ」を説得する能力であり、一部のジャッジのみを説得するものではない。ここを考えると、ジャッジは自分一人だけに通用する論理や価値観やマニュアルをもちいてディベーターを説得することは客観的であるとは言えないと同時に、ディベーターを説得させることさえもできない。この意味でディベートにおけるジャッジはある程度「聞き上手」でなければならないのだ。

² もちろん主観をすべて排してジャッジをすることはできないが、ここでいうできるかぎり主観を排してと書いたのは、たとえば、自分の意見に反していることでも、ディベートの試合である程度納得がいくような形で議論されてあればとるべきであるということだ。なぜならディベーターはジャッジとディベートをしているのではなく相手チームとディベートをしているからである。ここを認識することは重要である。

そして、この客観性を持ちつづけて「聞き上手」になることは難しい。たとえば、同じような議論を何十試合もジャッジしていると議論に対する先入観、ここでいうマニュアルに自然と心が捕らわれる。これを打ち破り、新しい価値観を取り入れるのは勇気の要ることだし、難しいことかもしれない。しかし、その議論を正しいと判断したならば、マニュアルに捕らわれず、開かれた心で議論を評価するべきである。なぜなら、何が良い議論で、何が悪い議論なのかは常にジャッジが問いつづければならない永遠の課題だからだ。

3.1.2 予測可能なジャッジ

次に取り上げる良いディシジョンメーカーとは「ディベーターにとって予測可能なジャッジ」でなければならないことだ。つまり、自分が下した判定がディベーターに理解されるジャッジでなければならない。たとえば、試合中に忘れられた議論に突然投票するとか、勝手に自分の判断で肯定側の議論を論題とは無関係 (Non-topical) としてしまうジャッジは良いディシジョンメーカーとは言えないだろう。

このようにディベーターの意図しないところだけで勝敗を決めるバロットを書いてしまうと、ディベーターに理解されないだけでなく、彼らの真摯にディベートに取り組もうとする気持ちを殺ぐおそれがある。つまり、何を基準に試合前に準備しなければならないのか分からない状態にディベーターを陥れるのだ。

アメリカではこのようなジャッジを Random bullet と呼び非難している。今年の6月来日したアメリカ代表ディベーターの一人である Andy Peterson さんは私とのメールのやり取りで、以下の文章を残している。

Random bullet is American debate slang for a bad judge. Debaters often feel that a judge's decision, especially the decision of a bad judge, is very random. They may ask "Why did they

vote on that?" or "How could they have thought that impact was the most important?" The joke, in America, is to call this type of judge a random bullet. When they are judging, you never know which team they are going to kill (vote against). Thus, they are random bullet³.

そして良いディジョンメーカーとは、ディベーターの議論を正当に評価すると同時に、ディベーターの展開した議論に合わせて判定理由を書くことである。そのほうが彼らをより説得できるし、与えるフィードバックも大きい。

3.1.3 公平なジャッジ

三つめは、ジャッジのディベーターに対しての「公平性」である。これは「良い」ジャッジの条件というよりもジャッジとしての前提条件に当たるかもしれない。要するにひいきせず、公平に判定を下さなければならないということである。知っているチームだからといって点数を上げたり、有名大学のディベーターよりも無名大学のディベーターのほうが簡単に説得できると考えてパロットを書いたり、ディベーターの笑顔に投票したりしてはならない。当然のことであるが、もっとも大切なジャッジの条件の一つである。Walter Ulrich は *Judging Academic Debate* に、ジャッジの公平性の大切さを以下のように論じる。

Each judge strives to reach a decision in a fair manner. Debaters cannot be expected to remain in an activity if they are constantly judged by individuals who make arbitrary and unfair decisions. Nor can debaters be expected to continue to work hard if their speeches are evaluated by individuals who make unfair decisions. The essence of debate as a competitive

activity assumes that debater will be evaluated by fair, attentive individuals who make decisions based exclusively on the issues in the individual round. (3)

3.2 良い教育者の条件

3.2.1 積極的にディベーターを教育する姿勢

ディジョンメーカーとしての役割を認識しているだけでは、良いジャッジとは言えない。ここでは、教育者としての役割を認識することがいかにジャッジにとって大切かを考えていきたい。

はじめに取り上げる良い教育者としての条件は「ディベーターを積極的に教育しようとする姿勢」である。この姿勢を保つことはかなりの根気を必要とする。だが、この気持ちさえあれば、ジャッジングのスキルは必ず後からついてくる。たとえば、試合後リフレクションに自ら積極的にディベーターのほうに歩み寄りコメントする姿勢などは大切ではないかと思う。

4年生の中には、現役時代の自分のディベート成績を気にしてジャッジするのを躊躇したり、断ったりするのをよく目にするが、それを気にする必要は全くない⁴。過去の実績で良いジャッジングができれば苦労はないのだから。そしてディベートが好きであるならば、どんどん貪欲にジャッジをしてそこから多くを学んで欲しいと思う。ジャッジは今でも慢性的に足りない状況にあるのだ。

ではディベーターを教育する姿勢をもった場合、ジャッジは一体どのようなことをしなければならぬか次に考えていきたい。まず、これを実践することはさほど難しいことではない。たとえば、パロットをできる限り詳しく書き、その試合で感じた多くのことをディベーターに

³ 是澤克哉投稿、「魁！是塾！！ML」[sakigake:00479] 「Ask Andy about debate!!! 3 - イラジャッジ必見-」の中での、Andrew Peterson のコメント。

⁴ ジャッジの中には自分のジャッジングフィロソフィーに勝率何割とか、どのトーナメントに勝ったなど自分の過去の栄光を書く人がいるが、それと人のジャッジングとは全く関係がない。

フィードバックしてあげるだけでもかなりの教育的効果がある⁵。そして、なにより負けたチームが納得のいくようにパロットを書く必要がある。ディベーターは勝った試合よりも負けた試合から多くを学ぶものだし、自らの経験からも分かる通り、負けたチームの方がパロットを良く見て改善する。それに勝ったチームを説得するのは簡単である。

さらにできるならばそのフィードバックの結果として、ジャッジが思った良い議論はどんどん推奨していき、悪い議論はディベーターに使うのを思いとどまらせるべきである。それがディベート界の議論の向上に大きく貢献するからである。

3.2.2 知識に裏打ちされた教育

良い教育者として次にとりあげるのは、ある程度「ディベートや論題に関する知識が必要」ということである。これはディベーターに試合後フィードバックをする際に、議論をどのように評価したのかと同時に、次の試合に向けてどのように効果的に準備をすれば良いのかアドバイスをした方がより高いフィードバックをディベーターに与えることができるからだ。その際に論題やコーチングに関して知識があれば、より幅広く助言できる。

ここでもっとも大切なことは、感じたことすべてをディベーターにアドバイスするのではなく、「ディベーターが自分たちで考えなければならない部分」と「自分がそのディベーターにできる部分」をしっかりと認識したうえで、アドバイスをしなければならない。つまり、近視眼的にたくさんの魚を一度に与えるのではなく、長期的な視野を持ち魚の取り方を教えるような

アドバイスが望ましい。そうでなければ一時的にその場で理解したとしても、なかなか応用ができないだろう。その結果ディベーターは育たない。ディベーターを育てるという視点をもってアドバイスをすべきである。

3.2.3 ディベーターに対して友好的である姿勢

最後に取り上げるのは「ジャッジはディベーターに対して友好的であるべき」である。これはジャッジだけではなく、ディベーターにもいえることだが、ジャッジとディベーター、双方が壁を作らず、自由に主張できる雰囲気を作ることにはディベート界全体にとってプラスになる。なぜなら、ディベーターとジャッジの関係が良好であることは、良いフィードバックができる環境を作ることにつながるからだ。ジャッジはディベーターに早くアドバイスができ、ディベーターは気兼ねなくジャッジに聞くことができる。このような環境を試合後のリフレクション以外でも作っていったらと思う。

最近ではウェブサイトの掲示板で、一部のジャッジのことを「大御所」という言葉をもちいて非難したり、その匿名性を悪用してジャッジやディベーターを中傷したり、文句をぶつけているのを見かける。この状態が正常とは思えない。ジャッジとディベーター間の相互理解が書いているからだ。だから、英語政策ディベート界ももう少し、ジャッジとディベーターとの関係に重点を置いてディベート界の発展を考えるべきである。

この点に関して Ulrich はディベーターとジャッジ間の友好的な雰囲気がいかにディベート活動に大切なのかを述べている。

Another function of a judge is to promote an atmosphere that is favorable to the debate community. The judge sets the tone of the activity, both for the teams in an individual round and for others in the forensic community. ... Through the tone of the judge's critique the judge can either

⁵ これは義務ではないが、パロットのコメント欄も同様に詳しく書いて欲しい。なぜならディベーターにとってコメント欄は、どのように自分がジャッジに見られているのかを知る場所であるからだ。中にはコメントを書かなかったり、試合とは関係のないことしか書かなかったりするジャッジもいるが、この態度は全く関心しない。

create a pleasant atmosphere for debate or create an unpleasant environment. ... If the Judge does not attempt to develop a fair philosophy, this attitude is likely to be passed on to his or her students. On the other hand, if the judge is conscientious and strives to be fair and objective in making decisions, this behavior can encourage similar behavior in members of the debate squad. Mature conduct of all people involved in a tournament fosters a favorable climate of competition. (4)

さらにディベーターにも同じことが言える。今年の6月来日した Barbara Pickering 教授も 1999 年度の NDT のフィロソフィーで以下のように書いている。

I do not appreciate debaters who are rude and/or obnoxious during the debate or in ensuing conversations (i.e. judge bashing). I view debate as a competitive activity, however, this does not give license to rude behavior. (Pickering)

このように日本の英語政策ディベート界も、大会主催者側だけでなく、個人レベルでもっと開かれた雰囲気作りに気を配って考えていかなければならないのではないだろうか。それによって良いフィードバックができる環境が作られていき、それがディベート界の議論の向上につながり、さらにはジャッジやディベーターの質の向上にもつながっていくのだ。

おわりに

英語政策ディベートのジャッジをするようになって、今年でまだ3年目である。だから、この文章を書くにあたって私のような若輩者がディベートジャッジについて論じる資格があるのだろうか考えた。しかし、大学生英語政策ディベートジャッジの年齢層は総じて低い。それによって私を含めたジャッジの質も高くはないと

思う。この現状を考えたら、書かずにはいられなかった。そして、この文章は自分自身に対する自責の念も多分に含まれている。今後もディベート界全体にとっての「良いジャッジとはどうあるべきか」を考え続け、それに少しでも近づけるように努力していこうと思う。

引証資料リストと参考文献の紹介

青沼智 「ディベート教育についての個人的見解」, 『ディベート・フォーラム』, Volume , Number 3, pp. 69-78

佐藤弘司 「アカデミック・ディベートにおける教育目標 - 勝利至上主義のススメ - 」, 『ディベート・フォーラム』, Volume , Number 4, pp. 215-240

矢野善郎 「<良いジャッジ>を求めて」, 『ディベート・フォーラム』, Volume IX, Number 3, pp. 187-98

Balthrop, V. William. "The Debate Judge as 'Critic of Argument'", *Journal of the American Forensic Association*, 20 (Summer 1983), pp. 1-15.

Dauber, Cori. *Debate as Empowerment*, *Journal of the American Forensic Association*, Volume 25 (Spring 1989), pp. 205-7

Pickering, Barbara. "Judging Philosophy" from *King's Collage Home Page*, URL: www.kings.edu/debate/Judges/NDT1999/P%20Q/Pickering.html

Rowland, Robert. "The Debate Judge as Debate Judge: A Functional Paradigm", *Journal of the American Forensic Association*, 20 (Spring 1984)

Thomas, David A. "Judge Adaptation", *Advanced Debate: Readings in Theory Practice & Teaching*. 3rd ed. Eds. David A. Thomas and Jack Hart. Lincolnwood, IL:NTC, 1985

Ulrich, Walter. *Judging Academic Debate*, Lincolnwood, IL: NTC, 1985

Ulrich, Walter. "In Search of Tabula Rasa",
*Advanced Debate: Readings in Theory Practice
& Teaching*. 3rd ed. Eds. David A. Thomas and
Jack Hart. Lincolnwood, IL:NTC, 1985
Ziegelmüller, George. "The Role of the Coach",
Directing Forensics: Debate and Contest

Speaking. Eds. Don F. Faules and Richard D.
Rieke. Scranton, PA: International Textbook
Company, 1968

(これさわかつや) e-mail: chakky@par.odn.ne.jp